〈論文〉

『罪と罰』における多面的有機体としてのスヴィドリガイロフ

―現代性が青少年におよぼす影響を理解する一助として―

稲垣智則

要旨

本稿では，井筒俊彦・小林秀雄・J. M. Murry の論をもとに，複数の元型的特徴をバックボーンとする多面的有機体としてスヴィドリガイロフを位置づけ，(1) 虚無，(2) 仮面，(3) 享楽という三つの特徴を検討した。ある種の青少年が持つ退廃的な耽溺傾向（たとえば「悪趣味」ともいえるアニメ・マンガなどを過剰に消費することなど）について，人々がその奥にある力を意識化できていないことに由来すると仮定すると見えるものがあるのではないか。その力とは多面的有機体としてのスヴィドリガイロフであると“名づける”ことができれば，少なくとも意識化することができ，また影響力を弱める一助になると思われる。

キーワード：罪と罰，ドストエフスキー，元型，パーソナリティ障害

1：はじめに

井筒俊彦はドストエフスキーを「見霊者」と呼んだ。「彼にあっては画面はいつも二重写しでぼけている。彼が描くペテルブルグの風景は常に幻影のような印象を与える。これはドストイェフスキーが，日常的人間生活の現実を平面的に描いているのではなくて，実は表面的な現実の向う側に存在するもう一つ別の世界を象徴的に描こうとしているからである。…彼はいわばこの時間的秩序の向う側に，時間のない世界，時間的世界とは全く質を異にする世界，時間を超越した永遠の秩序を見ていた（傍点ママ）」（井筒，1958）。井筒の表現は，ユングによる集合的無意識，元型的な世界と近似のものを示していると考えてよいだろう。そして井筒の指摘が正しいのであれば，ドストエフスキーは集合的無意識の，元型的な世界を部分的に写生した，という可能性がある。

ただし，ドストエフスキーの作品が持つ世界では，陰鬱なものが流れる闇の側面があまりにも強調されているため，偏った「見霊」であったことを考慮する必要はある。ドストエフスキーによる，瘴気立ちこめるペテルブルグの描写と，その中を闊歩する悪霊たち。『罪と罰』における登場人物スヴィドリガイロフは，その中でも恐ろしく強烈な力を持っている。

小林秀雄によると，ドストエフスキーはノートの中に以下のような記述を残しているという。「情熱的な荒々しい衝動。冷眼もない，絶望もない，バイロンによって表現された様なものは何一つない。享楽と飽満とに対する限りない満足する事を知らぬ渇望。生きようとする止むに止まれない渇望。享楽と飽満との多様性。完全な自意識とあらゆる享楽の解剖。而もこの解剖は天性自らの要求，有機体の要求であるから，享楽の解剖によって衰弱を感ずるという事がない。芸術的な享楽は遂に繊巧極まるものとなるが，同時に獣的なものとなる。というのはまさに限界のない獣性は繊巧と結びつくという理由による（生首）。心理的な享楽，神秘的な享楽（夜）。僧院の懺悔の享楽（厳格な断食と祈り）。乞食の享楽（施物を求める）。ラファエルのマドンナの享楽。窃盗の，強奪の，自殺の享楽（卅五歳で財産を相続した。それまでは先輩を恐れる教師であり官吏であった――寡婦）。教育

の享楽（彼が勉強するのはそれ故だ）。善行の享楽」（小林，1939）。この着想がスヴィドリガイロフという登場人物に結晶したと，小林は解釈する。そして小林は「この様な言葉を骨格とした人物とは一体どの様な人間であるか。というよりどの様な怪物であるか」と続ける。「享楽家スヴィドゥリガイロフ，毒害を享楽し，暴行を享楽し，幽霊を，懺悔を，同情を，愛を，自殺を享楽する男。而も享楽に関する執拗な自意識が，享楽の陶酔を全く許さぬ男。限界のない獣性が繊巧にまで達した様な男，こういう男の顔が仮面に似ずしてどんな生き物に似ていようか。限界のない享楽は仮面と結ぶ，虚無と結ぶ。ドストエフスキイの著想中における享楽という言葉は言わばこの世の意味を消失しているのである」「興味の対象は一切その意味を失い，興味だけが存するとでもいう様な精神の地獄こそ，スヴィドゥリガイロフが背負わされた作者の着想なのだ」（小林，1939）。

小林の言を借り，享楽・仮面・虚無という特性を持つ多面的有機体としてのスヴィドリガイロフについて，そしてその現代における影響の現れ方について考察する。

2：「呪い出された」スヴィドリガイロフ

若松（2011）によると，「イギリス人の書いたドストエフスキー論中『一番面白かったもので』，『最も特色のあるもの』と小林が評したのはJ. M. マリの『ドストエフスキー』である」という。マリは，まるで何かに打たれているかのように，以下のように記している。「彼がこの世に呪い出した――この言葉を熟慮の末に用いるのだが――霊どもに思いをはせるとき，ときおり感覚を絶した恐怖に襲われるのだ。恐るべき一瞬のあいだ，私は永遠の眼で事物を眺めるかと見えて，日も星も冷えゆくのを見，荒涼として氷結した宇宙を音もなく横ぎって呼び合う声のこだまを聞く。…そして私は，思うだにぞっとする――いつかこれらの霊どもが人間の姿をとって人々のあいだをさまようのではないかと恐れるのだ」（Murry，1916）。また，「スヴィドリガイロフはドストエフスキーの新しい言葉であった。この性格の創造によって，彼独特の事業が始まったのである。彼はこの観念をかつて夢想だもされなかった高さと深さとに発展させ，それを磨き上げ，いよいよ現実的なものとして，ついに人間的なものと人間的ならぬものとが混淆してしまう観を呈するまでにいたらしめることになる。／だからしてわれわれは是が非でもスヴィドリガイロフを理解しなければならないのだ。彼は暗黒の底から呪い出された一個の怪物かもしれぬ」（Murry，1916）と記している。マリにとって，ドストエフスキーを理解する際，スヴィドリガイロフは極めて重要な存在であったことが読み取れる。

呪い出すという強い言葉が用いられているが，原文でも“the spirits which he has conjured up”となっている。“conjure”は，超自然的な力や呪術によって異界のものを召喚するという意味であるから，呪い出すという表現で間違いない。マリは，その言葉がどのような印象を与えるか十分に理解した上で，あえて使用しているということになる。マリの理解が正しければ，ある種超自然的なドストエフスキーの力によって，集合的無意識側から召喚されてしまった一つの型，ある部分では元型的なものであるととらえることも可能であろう。そして，それだけの威力を持つ型であることは確かである。実際に，ドストエフスキーの作中には，『悪霊』におけるスタヴローギン，『カラマーゾフの兄弟』におけるイワンなど，スヴィドリガイロフの亜型がたびたび登場し，極めて重要な役割を果たしている。スヴィドリガイロフ的なあり方へのカウンターをどのように充てることができるか，その弁証法のために，ドストエフスキーはすべての力を使っているようにも読める。

ただし，スヴィドリガイロフを元型の一つとしてとらえることはできないようだ。スヴィドリガイロフにはトリックスター元型的な特徴や，主人公ラスコーリニコフのシャドウ元型的な特徴なども垣間みることができるため，ユングの示す様々な元型をバックボーンとして持つ，一つのまとまりを持った多面的有機体であると考えた方がよい。たとえば，姑獲鳥という妖怪は，グレートマザー元型の一つの現れであるかもしれないが，姑獲鳥という妖怪の名でしかとらえることができない事象も存在する。そのような意味で筆者は，現代に息づく一種の妖怪的な多面的有機体としてスヴィドリガイロフをとらえたい。

3：現代におけるスヴィドリガイロフ的なものの影響

それでは，現在，ドストエフスキーによって「呪い出された」スヴィドリガイロフ的な力はどのように働いているのだろうか。たとえば，『エヴァンゲリオン』『涼宮ハルヒの憂鬱』『魔法少女まどか☆マギカ』などの，サブカルチャーにおいて未だに影響力の強いアニメーション作品群からは，筆者は共通する虚無性を感じる。これらの制作者がスヴィドリガイロフ的なものに憑かれているというよりも，スヴィドリガイロフ的なものの影響力が広汎に渡っており，スヴィドリガイロフ的なものに支配された一種の土壌が形成されている，と受け取った方がよいのかもしれない。例として挙げた作品に共通する印象は，真皮をむき出しにされたような，ヒリヒリとしたものである。それは極めて露悪的であり，破壊し，解体し，デカダンス的に虚無へと向かう印象を与える。それは一種の終末思想，黙示録的といえるかもしれないが，自暴自棄な，享楽的な終末観である。

上述の作品を非難しているわけではなく，筆者はその完成度を評価している。しかしそれらの“人気が出る”“影響力が残る”という点に危惧を覚える。解体され，破壊的であり，真皮をむき出しにされるようなヒリヒリとした印象を与える作品の“人気が出る”ことの意味は何であろう。“悪趣味だ”“嫌だ”と感じることなく，むしろ悪趣味であるがゆえに，それらに引き込まれることの意味は何であろう。おそらくそれが，元型的な力を意識化できない際に起こる事象なのではないか。

このようなタイプの作品群は“都市”を題材とすることが多いようである。そして，科学技術，近未来の技術が用いられているという設定も多い。その“都市性”や“技術”は，ある種の現代性の象徴であると受け取ることもできるだろう。井筒（1958）は，ドストエフスキーがペテルブルグを舞台とする理由について，以下のように解釈する。「ドストイェフスキーは人間の運命を，人間のあらゆる生活形態の中で最も自然性から遠く距った大都市の，薄ぎたない薄暗い巷に追求する」。都市には人工物が多く，自然的なものが少ない，という特徴はあるだろう。そして，人工性に囲まれた都市的環境では，「他の一切の存在とのつながりを断ち切られて，人間はただ人間だけで存在している」。そして井筒は，ドストエフスキー作品中の登場人物について，以下のように続ける。「彼らの胸には自意識以外の何もない。美しい自然の祭典に，うつろな絶望のまなざしをじっと注ぎながら，彼らは自分の『隅っこ』に身を固くしてうずくまる」「彼らには人を愛するということができない。自分の中に閉じこもり自分をすら愛することができない」。それは，「他人を愛するとは人間が自分の外に出て行くこと」だからである。

ドストエフスキーの作品における都市性と，現代におけるマンガ・アニメ・ゲームなどにおける都市性を等価に比べることは困難ではあるが，しかし「他の一切の存在とのつながりを断ち切られて，人間はただ人間だけで存在している」という性質は考慮に値するだろう。ここでいう，「他の一切の存在とのつながりを断ち切られて」とはいかなる意味であろうか。井筒は「自然性から遠く距った」と記しているが，筆者はこの自然という表現を象徴的なものであるととらえ，内的世界，すなわち集合的無意識とのつながりが失われていることであると解釈する。

現代に息づく妖怪（多面的有機体）としてスヴィドリガイロフをとらえれば，少なくとも，そのように名づけることができれば，意識化しやすくなるものと思われる。そして，露悪的なものが“流行”し，二次・三次的なコピーをあたかも“本物”のように扱い，それらが“本質”をついていると感じ取ってしまうことが多数派となりつつあるような，“ポストモダン”的な状況が現代に跋扈し出していることを，筆者は危惧している。しかし，その背後にある力がスヴィドリガイロフ的なものであると仮定すれば，見えてくるものが多いのではないか。たとえば，不登校児童生徒の人数が増加すること，そして彼らが前述のようなアニメ・マンガを消費し，同人誌に強い興味を持ち，コピー・ペーストが氾濫するネット掲示板に耽溺することが多いことも，背後の大きな力を意識化できていないことに由来するとすればどうだろう。奇怪な少年犯罪も，いじめも，自傷行為が流行することも，刑罰が適用されていることが報道されてもなお，ネット上で写真つきの軽犯罪自慢が繰り返されることも，その奥にある妖怪的な力を意識化できていないことに由来するとしたらどうだろう。

本稿では，現代性が青少年におよぼす影響を理解する一助として，スヴィドリガイロフという妖怪的な力を仮

定する。まず，スヴィドリガイロフという多面的有機体が持つ特性を明らかにしたい。

4：スヴィドリガイロフの諸特徴

それでは以下に，スヴィドリガイロフが持つ性質を，(1) 虚無，(2) 仮面，(3) 享楽の順でとらえ直して行く。

4-1：虚無

『罪と罰』作中において，スヴィドリガイロフは主人公ラスコーリニコフに向って以下のように叙述する。「われわれはつねに永遠というものを，理解できない観念，何か途方もなく大きなもの，として考えています。それならなぜどうしても大きなものでなければならないのか？　そこでいきなり，そうしたものの代わりに，ちっぽけな一つの部屋を考えてみたらどうでしょう。田舎の風呂場みたいなすすだらけの小さな部屋で，どこを見ても蜘蛛ばかり，これが永遠だとしたら。わたしはね，ときどきそんなようなものが目先にちらつくんですよ」(Достоéвский，1866)。

この蜘蛛だらけの小さな部屋のことを“蜘蛛の部屋”と呼ぶこととする。しかし，なんと空虚なことか。何も無い砂漠や，時の止まった宇宙空間に放り出されたと言われた方がまだましである。狭く，苦しく，不潔な空間。単純な廃墟より質が悪い。

それでは，“蜘蛛の部屋”が持つ空虚，これは，なににによってもたらされたものなのか。そのヒントは，以下のマリの叙述から汲み取ることにする。「彼は年をとったラスコーリニコフであり，しかもわが意志は万物を獲得すべしとの決意の，年をとってもすこしも鈍らなかった男である。彼はおのれのうちにある力によって一人で立っているが，その力とは際限まで知ろうとする意志であり，この意志によって彼は人生にうち克とうとするのだ。彼は善悪の彼岸へと越えていった。彼はおのれの意志が万能であることを意志した」(Murry，1916)。マリによれば，ドストエフスキーの手に入れた，スヴィドリガイロフという「新しい言葉」の主たる要素は，その強烈な意志性であることになる。これは理性と読み替えても，意識と読み替えても，自我と読み替えてもよいだろう。

では，意志のみの存在となることによって，その代償として虚無が訪れるのであろうか。あるいは，虚無を見てしまったがゆえに，意志のみの存在と化したのであろうか。おそらく，意志の塊と化すことと，虚無を見てしまうことは，どちらが先ということではないのであろう。つまり，「時間なき世界のヴィジョン」(Murry，1916) をなんとか乗り越えるために意志へと駆動され，意志のみの存在となるにつれて虚無は広がって行く，という，いわば相互に影響し合う関係にある。

意志の権化，虚無を内包する存在。これがスヴィドリガイロフの持つ一つ目の性質である。

4-2：仮面

小林 (1939) は「毒害を享楽し，暴行を享楽し，幽霊を，懺悔を，同情を，愛を，自殺を享楽する男。而も享楽に関する執拗な自意識が，享楽の陶酔を全く許さぬ男。限界のない獣性が繊巧にまで達した様な男，こういう男の顔が仮面に似ずしてどんな生き物に似ていようか」と記す。ここでいう仮面とは，ユングのいうペルソナとは少々趣を異にする。おそらく，生気を失っていると表現する状態に近いのではあるまいか。確かに反応はし，受け応えはするものの，そこにはセルロイドのような，蝋人形のような，無機質なものが漂っているということであろう。おそらくマリが「彼らはすべて面のような顔をしているが，それはどんな肉身もこのような精神の相貌をおびることはできないからである」と記すのは，近似の状況を指していると思われる。ただし，マリはどちらかというと，あまりに純粋に精神的なものであるゆえに，現実世界における人間の表情という，様々なものが混淆したものは当てはまらない，という意味で用いているようである。しかしそれは，この世のものではない，という印象とも通じる。

生気を失った仮面性。これが，スヴィドリガイロフが持つ二つ目の性質である。

4-3：享楽

スヴィドリガイロフは様々なことを量的に消費する。先に引用した小林の文章にそのリストが掲載されているが，毒害と暴行と愛と自殺を同時に消費するあり方というのは，想像することが極めて困難である。しかし，『罪と罰』に接すれば，それらが同時に存在し得ることがある程度理解できる。スヴィドリガイロフという登場人物は，分裂もしていないし，破綻もしていない。すべて，意志の力で抱えている。

スヴィドリガイロフの，力強く純化した「際限まで知ろうとする意志」「完全な自意識」によって，「あらゆる享楽の解剖」が行われる。事象の質が無視され，純粋に，量的に追求されて行く。追求されること自体が量として消費されて行く。それが，スヴィドリガイロフの持つ三つ目の特質である。

5：「仮面」とそれを扱う中核部分

上述の状態が現れるにいたる，その道筋を考察する。

ユングは，「もし彼が個性的であれば，構えがいかに変化しようとも同一の性格をもちつづけるはずである。彼はその時々の構えと同一化したりせず，いかなる状況においても自らの個性が何らかの形で表現されることを彼は阻むことはできないし，また阻もうともしないであろう。実際には彼は，どんな生物でもそうだが，個性的であるけれどもそのことを意識していないのである。彼はその時々の構えと多少なりとも完全に同一化してしまい，そのため自らの真の性格について少なくとも他人を・しばしば自分自身さえも・欺いてしまうのである。つ

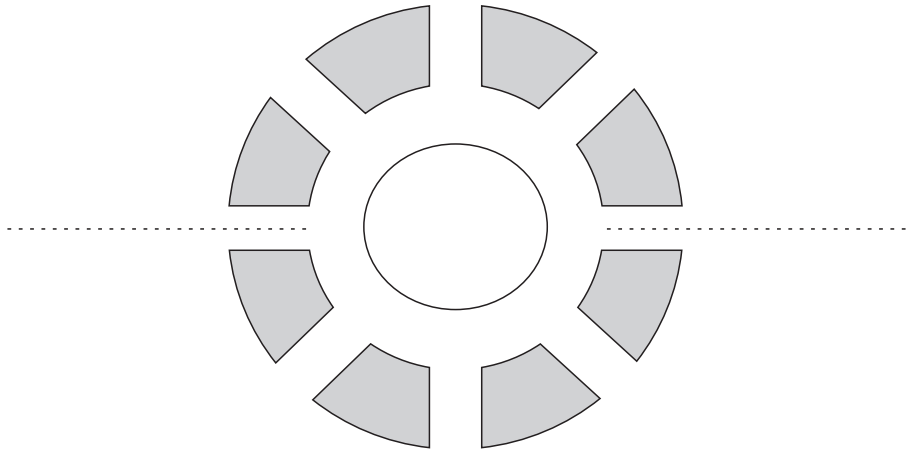

図 1

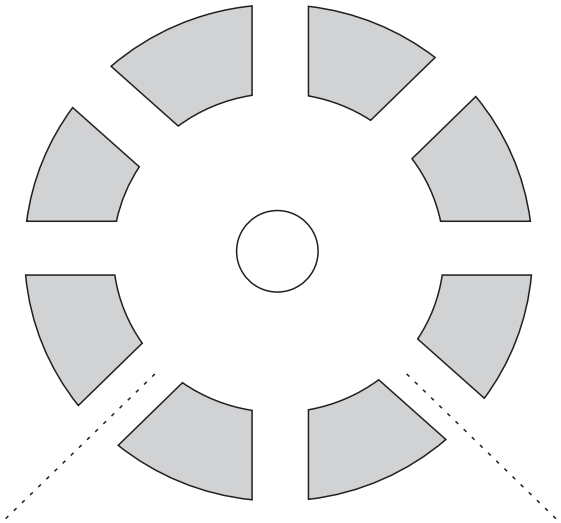

図 2

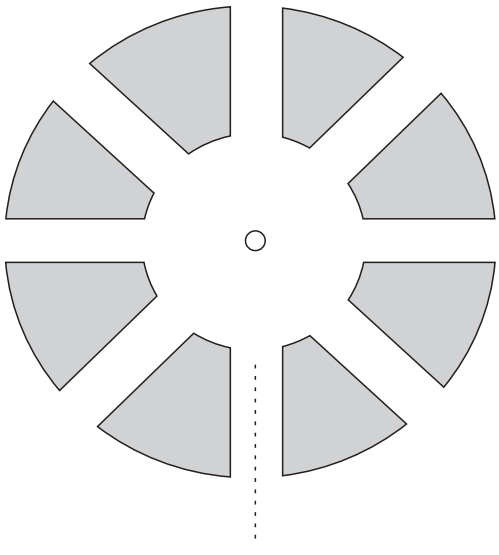

図 3

まり彼は仮面をかぶるのであるが，彼はこの仮面が一方では自らの意図にそい他方では環境の要求や意図にそうものであり，しかも時に応じてこのどちらかの要素が優位に立つことを承知している。この仮面・すなわち《この目的で》前面に出される構え・を私はペルソナと名づける（傍点ママ）」（Jung，1921）と記している。また，「非常な苦労の末にようやく実現される，この集合的心の一断片を，私はペルソナと名づけた。ペルソナという言葉は，実際それにふさわしい表現である。というのは，ペルソナがもともと，役者のつける仮面で，役者が演ずる役を表わしているからだ（傍点ママ）」（Jung，1928）とも記している。「集合的心の一断片」ということと，付け替え可能な「仮面」というイメージとでは少し異なるが，いずれにせよ，この「仮面」や「一断片」を用いる側，付け替えるメインとなる中核たるものが存在する，と仮定できる。

この中核部分が「仮面」「一断片」を用いる際に，ある種のエネルギーが必要であると仮定する。このエネルギーが枯渇する様子を図示する（図１から図３）。

以下は仮説である。

「仮面」「一断片」を用いる中核部分には，ある程度の大きさがあるように描かれているが，これは大きい場合にはエネルギー量が足りている状態，小さくなるとエネルギー量が不足している状態を表している。そして，エネルギー供給は集合的無意識側からなされていると仮定する。

便宜上，半分より上を外的世界，半分より下を内的世界とする（図１）。下側の，さらに奥底からは集合的無意識からエネルギーが流れて来ている。内的適応とはこの場合，集合的無意識の持つ元型的な世界と“ある種の関係”を持つ，ということになる。

機能の集合体を外的世界への対応に割き過ぎると，内的世界への対応がおろそかになる。これが図２の状態である。内的世界と接する範囲が狭くなり，集合的無意識からのエネルギー供給が少なくなる。結果的に，中核部分が持つエネルギー量は小さくなる。中核部分のエネルギー量が不足すると，機能の集合体は自律的に動きはじめてしまう。これが，「環境の要求にそうようになるほど，彼は個性的でなくなり，集合的となる」状態であると考えられる。過剰適応と呼ばれる状態はこの段階であると筆者は想定している。

さらに，この状態がゆきすぎると，図３に変化する。現実と応対する機能の集合体はすべて外的世界へと向けられ，内的世界は見向きもされなくなる。集合的無意識の定義上，完全に遮断されている状態というものは存在しないのであろうが，こうなると，集合的無意識からのエネルギー供給は極端に少なくなり，中核部分のエネルギーはほとんどなくなってしまう。極端な場合には，中核部分を動かすエネルギーはゼロである。

つまり，図３がスヴィドリガイロフのゆきついた状態であると考えてはどうか。

図３の状態が量的側面へ没入していることを表しているとすると，質的側面というのはこの場合，内的世界が担っている，ということになる。質的側面，集合的無意識との接続部分を失った状態，それがスヴィドリガイロフの置かれている状態だとするとどうだろうか。ある意味では，中核部分のエネルギーは虚無となり，機能の集合体だけが自律的に存在している地獄である。「あらゆるものが彼の興味を惹かなかった。併しあらゆるものに興味をもつ振りをする能力は生き生きと彼のうちに生きている」（小林，1939）とは，中核の主体的な選択なしで，機能の集合体のみが自律的に働いていることと対応させることができるだろう。

6：外的適応と内的適応

以上，中核部分の脆弱化について図示を行ったが，次に内的に適応するという点について，異なる図を用いて考察する。

図４は，河合（1967）が示した図を元に改変したものである。内的な適応とは何かを考える際，たとえば外的な適応の写し鏡であると仮定する。外的な世界とのやり取りとは，物を売買したり，仕事をしたり，衣食住を行うことなどである。それらは意識によって行っている。意識的な生活の中で出会った人々，物事は，眠った際に見る夢に現れることもある。

外的世界→意識→個人的無意識

といった順に情報は流れ，眠った際に夢の中に登場すると考えることができる。外的世界において不適応がある

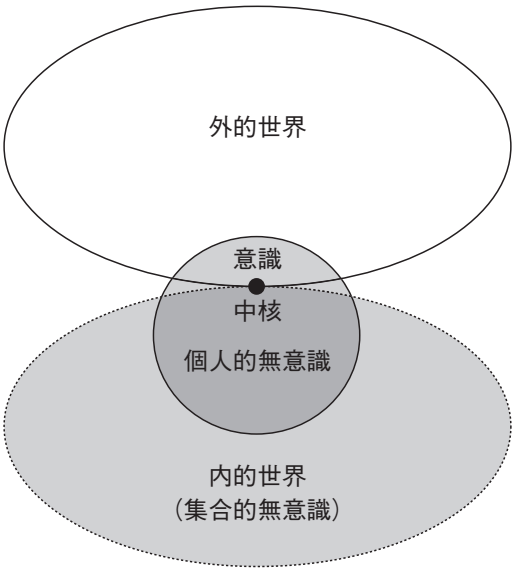

図 4

と，それが夢の中に様々なかたちで現れることは，Freud（1900）が詳細に示している。

では，内的世界でのやり取りとは，夢を見る（願望充足的な夢ではなく，神話的・元型的なモチーフの夢），内的な印象を絵に描く，歌う，踊るなど，感じ取ると表現するより他ないもので構成される。

内的世界→個人的無意識→意識

といった順に情報は流れ，我々が意識できることになる。この際，特徴的なことは，何らかのかたちで表現することでしか，意識側に伝えることができない，という点である。夢日記や言語化も表現の一形態であることに留意する必要があるだろう。そのため，内的世界における適応とは，やり取りというよりも “汲み上げる” と表現するほうが適切かもしれない。

当然，外的世界とのやり取りは重要であり，欠かすことができない。これがなければ，まず生活ができない。しかし，それと“同程度”に，内的世界とのやり取りも重要である。この，内的なやり取りが失われる場合に，元型による“乗っ取り”“憑依”が起こる危険性が高まると考えてよいだろう。つまり，内的世界からのエネルギー備給が足りず，中核部分が弱った状態であるため，元型の乗っ取りにも脆弱であるということになる。それはあたかも，自我境界が弱いために，外的世界から洗脳され，個人的無意識を乗っ取られることの合わせ鏡のように見てとることができよう。

つまり，意識の権化となったスヴィドリガイロフは，理性によってすべてを征服しようとしたことになる。しかしその際，征服できるのはせいぜい個人的無意識部分までといえよう。集合的無意識は，外的な世界における宇宙と同程度に広がっているのである。個人的無意識を徹底的に意識によって征服しようとしたそのとき，“蜘蛛の部屋”が現出するのは，筆者にはそれほど奇異なこととは思われない。それは，生命のエネルギー源から切り離され，生きながらに死ぬことである。

7：境界性パーソナリティ障害と自己愛性パーソナリティ障害との関連において

スヴィドリガイロフが臨床的な問題とどのように関わるのか，という点についてであるが，二つのことが考えられる。

1）スヴィドリガイロフになりたい症候群（“want to be スヴィドリガイロフ”）
2）本当にスヴィドリガイロフ的なものに接近してしまった者

これらは一見似ている。しかし，根本的な部分で異なる。それは，本当に虚無と対峙したか否か，という点である。

7-1：“want to be スヴィドリガイロフ”

土居（1965）は防衛機制の観念化（intellectualization）にまつわる部分において，「年頃になって分別くさくなるというのはこの事実をさしている。ここで分別くさいといって，単に分別といわないのは，青年がそれこそ観念的に，すなわち頭だけでわかって実生活が伴わないからである」と述べている。この「実生活が伴わない」という点を，虚無と実際に対峙したか否か，という点に合わせると理解しやすい。確かに，虚無と対峙した者には深みがある。それはある種の“格好よさ”を持っているかもしれない。そして，虚無と実際に対峙していないにも関わらず，真に虚無と対峙した者に（意識的に，あるいは無意識的に）あこがれ，見聞きしたことからあたかも自らがそれに触れたかのように気取り，その振りを続けるうちにこじらせて行く。その状態が“スヴィドリガイロフになりたい症候群”である。

この場合特徴的なのは，歪んだ甘えの存在である。土居（1997）は「甘え」を「気ままに依存すること」と定義し，「甘え」は「行動それ自体よりも，それが示している感情のこと」であり，「その実現のためには他者を必要とする故に，心理的依存を含む」としている。その意味で，ラスコーリニコフは友人ラズミーヒンの献身的行為，および妹・母の存在に，（意識的に関係がないと言い続けるという逆説的な）心理的依存を「気ままに」行っている。このあたりが，ラスコーリニコフに一種の青臭さを感じさせる所以ではある。

ラスコーリニコフ的なあり方は，境界性パーソナリティ障害，および自己愛性パーソナリティ障害の“一部”に当てはまる。たとえば，Masterson（1981）の著書に多数掲載されているケース記録からも，そのことを感じ取ることができる。特に，Masterson が（母からの）分離と自立を目標としている点からしても，（その観点からすれば確かに）彼らは「甘え」ている。

そして，この状態にあるときに特徴的なのは，自分自身のイメージが大変卑小なものとなることである。枚挙に暇がないが，たとえば「小心で，まるっきり空虚で，『鼻たれ小僧』で，無力な競争能力のない男」「自分が退屈で，鈍くて，無能な感じ」「僕より優っている人々と比べてみた自分の『くだらなさ』」「悪く，醜く，胸がむかつく，つまらない者という感じ」「野球のバットで打たれた子猫，糞みたいなもの」「不快な昆虫」「のろまで退屈で，モグラのよう」「罪深く，見当違いで，能がなく，役に立たない」「無価値で，罪深く，虫けら，ナンキンムシ同然」「虫けらかばい菌」「無価値で卑劣で愛らしくない，愛される資格がない」などである。ラスコーリニコフは，自身が殺害した高利貸しの老婆のことを世間に無用の「虱」と呼びながらも，殺害した後になって，実は「虱」だったのは自分自身のほうではないか，と思い悩む一連の流れの中に，そのことが彷彿と浮かび上がっている。これは，一種の空虚さと見えることがあろう。

その他，虚無という点において，たとえば「明かりのない暗い部屋にいる感じがすること」，「死ぬことや，年をとることや，そんなことばかり考えて，絶望的になり無力感に悩まされます」（Masterson，1981）などの表現はあるものの，“蜘蛛の部屋”が持つほど強烈なものはない。あくまで他者との関係性の中での表現に留まっている。

また，他者から褒められることや認められることを求め過ぎるために，主体性がなくなり，偽りの自己となって行くことも，「仮面と結ぶ」（小林，1939）という表現に近くはある。しかし，それはあくまで現実界における「しばしばカメレオン的様相を呈する。すなわち彼らは自分の外見を周りの期待に添うように変えてしまう」（Masterson，1981）ような仮面的性質である。それは，過剰適応的な，機能の集合体自体が自律的に働く状態でもある。しかし，スヴィドリガイロフの持つ強烈な仮面性，虚無と向き合い真実の意味で生気を失っている状態とは似ても似つかない。

カメレオン的な仮面からは，他者の心配や関心を誘い出すために触手が伸びている。受動性の裏に隠れた，他者のエネルギーを吸い取ろうという積極性といえるかもしれない。しかし，スヴィドリガイロフ的な仮面は，そしてその奥に秘められた虚無から発せられる負のエネルギーは，目の前に本物のブラックホールがあるかのよう

な，凄まじい吸引力を持っている。享楽を追求する積極性の裏に隠れたタナトスとでもいおうか。

享楽という点では，「自分にはいつも『ほかの人々と結びつき（connection）をもち，絶えずその人たちからいたわってもらう（stroking）こと』が必要」「気分を楽にするためには刺激的なものを追い求めるか，あるいは女性との関係をもつかしなければならなかった」（Masterson，1981）など，類するものは多々見受けられる。ただし，あくまでさみしさや無力感，そして自分自身のことが大嫌いであることを“埋める”ためである。確かに意志や理性の側の暴走ではあるものの，スヴィドリガイロフ的な，「形而上学的な恐怖」（Murry，1916）から逃れるための放蕩とは異なる。やはり，ここにも対象への心理的依存という「甘え」を垣間みることができよう。

スヴィドリガイロフ的なものに憧れる，という点においては，確かにスヴィドリガイロフ的なものに“とらわれている”とは言えそうである。

他にも，サブカルチャーと呼ばれる分野，特にアニメーションやテレビゲームなどにおいて“want to be スヴィドリガイロフ”の性質が顕著に現れる場合もある。たとえば，『エヴァンゲリオン』『涼宮ハルヒの憂鬱』『魔法少女まどか☆マギカ』などの，サブカルチャーにおいて未だに影響力の強いアニメーション作品から，少なくとも筆者は真皮をむき出しにされたような，ヒリヒリとした印象を受けることは先述の通りである。これらの作品は女性を主軸として描かれており，Masterson（1981）の述べる意味での母親的なものから分離できず，飲み込まれる（および見捨てられる）不安という構造はあるのだろう。これをグレートマザー元型（それと密接な関係を持つ永遠の少年元型）から考えても，ほぼ同様の解が得られるはずである。

そして，これらに類似する作品群に親近感を覚え，実生活で“真似”を始める青少年がいくらか存在する。そのような状態をネットスラングでは「中二病」と呼称する場合があるが，ラスコーリニコフはまさに，「中二病」的である。彼は，本物の虚無と対峙していない。“虚無っぽい”ものに少し触れただけで，虚無と向き合ったと大仰に騒いでいるようなものである。児戯に等しい。「ドストエフスキーの眼には，ラスコーリニコフは不完全なスヴィドリガイロフ以上の人間では断じてありえなかった。…ラスコーリニコフなど彼にとっては木偶の坊にすぎなかったのである」（Murry，1916）。スヴィドリガイロフ本体は，ランクが違う。桁が違う。

7–2：本当にスヴィドリガイロフ的なものに接近してしまった者

小林（1939）によると，20 年来ドストエフスキーの友であったストラーホフは，ドストエフスキーのことを「動物のような肉慾を持ち乍ら，女の美に関して，彼が何んの趣味も感情も持っていなかった事にご注意願いたい。彼の小説を読めば解る事です。作中人物で彼に一番近い人物は，『地下室の手記』の主人公，『罪と罰』のスヴィドゥリガイロフ，『悪霊』のスタヴロオギンです」と評しているという。この記述を元にすると，ドストエフスキーそのものが“スヴィドリガイロフ的なものに接近してしまった者”なのであろうが，他にも，たとえばカミュ，カフカ，ハイデガー，サルトル，バタイユなどを挙げてもよいかもしれない。

このランクまで行くと，治療を受けるとか，誰かの援助を得てどうにかしたいという流れに入るか否か，すなわち患者として成立するか，甚だ疑問である。大抵の治療者のことは，ランクが下の，“浅はかな者”としか見えないのではないか。真の意味でこの虚無と対峙し，かつそこから抜け出ることができた治療者が存在するのであれば別だが，その場合，“治療”と呼ぶにふさわしいかどうか，筆者にはわからない。むしろ，ほとんど宗教的な“救済”の色彩を帯びてくるのではなかろうか。たとえばそのためには，『悪霊』におけるチーホン神父，『カラマーゾフの兄弟』におけるゾシマ長老レベルの精神が必要となるように思われる。

スヴィドリガイロフの若かりし頃であるかのような，『悪霊』におけるスタヴローギンは死の直前，ダーリャに宛てた手紙で以下のように記した。「わたしはよく知っている。わたしのような者は自殺すべきなのだ，穢らわしい虫けらのように，この地上から掃き捨ててしまわなければならぬ。けれど自殺は怖ろしい。というのは魂の偉大さを示すのがこわいからだ。そんなことは恥辱の上塗りだということはわかっている――はてしない欺瞞の連続の最後の欺瞞。そんなにしておのれを欺いたとて何になるのだ？　ただ魂の偉大さを見せびらかすためじゃないか？」（Достоéвский，1873）。自殺にしても，このレベルでの受け取り方である。自殺をすることに，「復讐」（Masterson，1981）的な，現世的な色彩はほとんどない。スヴィドリガイロフが自殺するシーンの空虚

さも，同様の性質を物語っている。「自殺とははや正体は見当のついている彼に残された一つの享楽に過ぎぬのである」（小林，1939）。

8：残り半分

Jung（1954）は，悪魔メフィストフェレスについて「神に逆らう知のシンボル」と表現している。『悪霊』におけるキリーロフは人神主義を説いた（この思想はスタヴローギンから引き継がれているものとされている）。神が存在しないのならば，自ら命を絶つことを恐れずに行うことによって自身が神となる，という主義である。ある意味で，「神に逆らう知」ともいえよう。また，『カラマーゾフの兄弟』におけるイワンもまた，強力な無神論を説く。それも，自分が助かるために，子どもが苦しむことが必要であるなら，謹んで天国行きのチケットをお返しするというような，ある意味神の存在を前提とした上での“反”神論である。これもまた，「神に逆らう知」なのであろう。どちらも，「知」によっている部分が特徴である。そしてキリーロフもイワンも，自然が描く姿に心を打たれている描写が存在する。ただし，イワンの兄であるドミートリィの感じ取るさらりとした感動とは異なり，理性にまみれた，膜のかかったような自然との“半分の”接続である。

『カラマーゾフの兄弟』の当該個所で記されている描写は，あくまで環境としての自然ではある。しかし，自然の風景の奥に集合的無意識的世界を，二重写しにではあるが感じ取ることができた，と読むとどうであろう。「キリーロフの木の葉の意味が本当に分れば，すでに世界の意義の半分は分ったも同様なのである。イヴァンの場合でもそうだった。だからイヴァンの言葉を聞き終わったアリョーシャは，『兄さんの仕事はもう半分は出来上がっています。今度は残りの半分をものにすることだけが必要です，そうすれば，きっと兄さんは救われます』と言ったのだった。しかしキリーロフもイヴァンもこの『後半分』でつまずいてしまう」（井筒，1958）。

そして，いわばキリーロフやイワン，ラスコーリニコフの「わが意志は万物を獲得すべしとの決意の，年をとってもすこしも鈍らなかった男」として，スヴィドリガイロフがいる。「観念に食いつくされた」（Достоéвский, 1873）状態ではなく，観念そのものと化してしまったかのような状態である。その意味では，メフィストフェレスとスヴィドリガイロフは近しい存在ともいえるのだろう。いわば「後半分」を無視し，しかもそこで潰えることなく「救われ」ない方へ邁進した状態が，スヴィドリガイロフである。

ならば，この「後半分」とは何か。容易につかみとることはできない。しかしたとえば，「前半分」とは，理性によって神的なものについて十分に考え尽くすこと，そして「後半分」は，真に集合的無意識と接続する，つまり内的に適応することであると仮定するとどうか。そしてこれが，スヴィドリガイロフ的なるものへの，最後のカウンターだったのではないか。つまり，ドストエフスキーの遺作『カラマーゾフの兄弟』におけるゾシマ長老の存在，そしてアリョーシャの成長に託されたものだったのではないか。

9：おわりに

意識のみで神的なもの（井筒ならば「本質」と呼ぶかもしれない）に近づこうとすることは，イカロスの翼が太陽に溶かされてしまうようなものなのかもしれない。しかし，集合的無意識の奥へ，意識の助けなく，無謀に突入することは危険である。外的適応，内的適応というように，どちらもまず，自身の肉体という“限界”を考慮した上で，その範囲内で“適応”することが必要である。肉体という制限の範囲を超えてしまえば，外的であっても，内的であっても，どちらであっても飲み込まれる。そして現代，特に欧米的なあり方の中では，外的なことにエネルギーを割き過ぎ，内的適応がおろそかにされる傾向はあるのだろう。

ユングは，「人間の世界史ははじめから〔意識に対する〕劣等感と〔意識を誇る〕不遜な心の格闘から成っている。智恵というのは中庸を求めるものであり，〔意識によって高まろうという〕この不敵な企てを，魔神や動物とのいかがわしい近接性によって補償し，そのために道徳的な誤解を受けやすくなるのである」（Jung, 1948）という。スヴィドリガイロフは補償することなく，中庸を求めることなく，意識のみによって振り切ってしまった。また，おそらくユングは核兵器を想定して「人間は実用的なものは力づくで手に入れたが，その代わ

りに世界に深い亀裂を生じさせてしまった」，そして「人類は科学技術の発達によって憑かれた状態になる危険にますますさらされていると思われる」と記している。

科学技術そのものが，自然を人間の思い通りにしたい，という欲望から出発し，発展して来たものだとするならば，それは「権力欲」，すなわち「思いどおりにならないはずのものを思いどおりにする」（中井，1997）という特徴を持つものである。科学技術の推進を止めることは極めて困難ではあるが，ここで「〔意識に対する〕劣等感と〔意識を誇る〕不遜な心の格闘」をしなければならない。いわば，外的適応を行いつつ，内的適応を“同時に”行わなければならない。これが見失われたとき，人類はスヴィドリガイロフ的なものに「憑かれた状態になる危険にますますさらされ」るのかもしれない。レベルの差はあるが，それが境界性パーソナリティ障害や自己愛性パーソナリティ障害を考える際に，一助となるのではないか。また，子どもたちが置かれている，「思いどおりにならないはずのものを思いどおりに」できかねない機器（たとえばスマートフォン）にかこまれている状況が，より内的適応を阻害する可能性もあることを考えたい。

本稿では，スヴィドリガイロフの特性に関する部分に終始した。現代における影響に関しては，まだ考察が不十分である。今後の課題として，実際にクライエントとの関係の中で，あるいは学校現場で児童生徒，あるいは保護者・教員と接する際に，スヴィドリガイロフ的な力を想定した場合に見えて来るものを具体的に挙げることができれば，と考えている。

謝辞

今回，ご多忙の中，本稿作成に際して多大なご指導を頂いた横山恭子先生（上智大学），武野俊弥先生（武野クリニック）に，深くお礼を申し上げます。誠にありがとうございました。

〈引用・参考文献〉（著者名はアルファベット順）

東浩紀（2001）：動物化するポストモダン――オタクから見た日本社会．講談社現代新書．
東浩紀（2007）：ゲーム的リアリズムの誕生――動物化するポストモダン 2．講談社現代新書．
Достоéвский, Ф. М.（1866）：*Преступление и Наказание.*（工藤精一郎訳（1987）：罪と罰〔上・下〕．新潮文庫．）
Достоéвский, Ф. М.（1873）：*Бесы.*（江川卓訳（1971）：悪霊〔上・下〕．新潮文庫．亀山郁夫訳（2010-2011）：悪霊〔1・2・3〕．光文社古典新訳文庫．）
Достоéвский, Ф. М.（1880）：*Братья Карамазовы.*（原卓也訳（1978）：カラマーゾフの兄弟〔上・中・下〕．新潮文庫．）
土居健郎（1965）：精神分析と精神病理．医学書院．
土居健郎（1997）：「甘え」理論と精神分析．金剛出版．
Freud, S.（1900）: *Die Traumdeutung. Franz Deuticke.* In: Gesammelte Werke, Bd. Ⅱ/Ⅲ.（新宮一成訳（2007-2011）：夢解釈Ⅰ・Ⅱ．フロイト全集 2・5．岩波書店．）
井筒俊彦（1958）：ロシア的人間――近代ロシア文学史．弘文堂．（井筒俊彦著作集 3　中央公論社に再録）
Jung, C. G.（1921）: *Psychologische Typen.* Rascher.（林道義訳（1987）：タイプ論．みすず書房．）
Jung, C. G.（1928）: *Die Beziehungen zwischen dem Ich und dem Unbewußten.* Reichl.（松代洋一・渡辺学訳（1984）：自我と無意識．思索社．）
Jung, C. G.（1948）: *Symbolik des Geistes.* Rascher. In：Gesammelte Werke，Bd. 9/Ⅰ.（林道義訳（1999）：元型論．紀伊国屋書店．）
Jung, C. G.（1954）: *Zur Psychologie der Tricksterfigur.* In: Radin, P., Kerény, K., Jung, C. G.: *Der götterliche Schelm.* Rhein. In: Gesammelte Werke, Bd. 9/Ⅰ.（林道義訳（1999）：元型論．紀伊国屋書店．）
河合隼雄（1967）：ユング心理学入門．培風館．
小林秀雄（1939）：ドストエフスキイの生活．創元社．（1964 に新潮文庫から再販）
Masterson, J. F.（1981）: *The Narcissistic and Borderline Disorders.* Brunner.（富山幸佑・尾崎新訳（1990）：自己愛と境界例．星和書店．）
Murry, J. M.（1916）: *Fyodor Dostoevsky: A Critical Study.* Martin Secker.（山室静訳（1977）：ドストエフスキー．泰流社．）

中井久夫（1997）：アリアドネからの糸．みすず書房.
Storr, A.（Ed.）（1983）: *The Essential Jung*. Princeton University Press.（山中康裕監修，菅野信夫・皆藤章・濱野清志・川嵜克哲訳（1997）：エセンシャル・ユング―ユングが語るユング心理学．創元社.）
若松英輔（2011）：井筒俊彦――叡智の哲学．慶応義塾大学出版会.

［Article］

Svidrigailov as a “multifaceted organism” in “Crime and Pnishment” An aid for understanding the effects of modernity on the youth

Tomonori INAGAKI

In this paper, based on the theories of T. Izutsu, H. Kobayashi, and J. M. Murry, the author investigated three features: (1) vacuity, (2) mask, (3) hedonism by mapping out Svidrigailov as a “multifaceted organism” possessing multiple archetypal features as his backbone. The consumption of rather vulgar animations/cartoons by certain type of youth or the epidemics of bizarre juvenile crime, bullying, and self-mutilation could be said to have caused by not being conscious of some “force” that lies deep within oneself. However, it is speculated that the act of “identifying” the force as multifaceted organism, Svidrigailov, would at least help one to be aware of it and attenuate its influence.

Keywords:Crime and Punishment, Dostoyevsky, archetype, personarity disorder